

第四十一回 宮島全国短歌大会

阿木津 英 先生 選

入賞作品

特別賞

広島県知事賞

広島^{だいほんえい}大本営あとの被爆樹ユーカリの下で砂浴ぶ一羽のすずめ

(二七八) 福岡 中村 仁彦

(評)

お堀で囲まれた広島城址は、かつて戦争の時代、広島大本営のあった場所である。堀にわたす橋の一方に被爆樹木ユーカリがあり、もう一方に被爆樹木マルバヤナギがある。爆心地から740mの距離だという。そこに立つユーカリは、行き交う軍靴の音、原爆の光と音、人々のうめき声を聞いた歴史の目撃者だが、いま、その根方には雀が一羽砂浴びをしている。このしずけさこそは、平和の証し。幾重もの歴史的時間を重ねて来たこの場所に、いまの平穏な時を味わう。平和を願うところの籠った、優れた一首。

日本歌人クラブ賞

軒下にトランジスタが置かれるて把手の端に田の泥のこる

(二二二) 山口 森田 アヤ子

(評)

通りすがりに見たのか、ご近所をたずねたときに見たのか。どうやら留守のようで、農家の家構えの軒下にトランジスタラジオが置いてある。見ると、把手の端に泥がついている。これを持って田んぼに出かけ、ラジオを聴きながら作業しているのだなと思う。ひっそりとした軒下の、少し泥のついたトランジスタラジオが、昼間の農作業をする姿を思わせ、動かぬちからをもって迫る。

広島県歌人協会賞

余興にはハーモニカ吹く世代なり八十男の吹く「背くらべ」

(二八五) 広島 古谷明子

(評)

ハーモニカという楽器はいつのまにか廃れてしまったようだが、むかしは誰でも持っている身近な楽器だった。なかに伴奏付で吹く子もいて、あこがれの的になったりする。この作者もそんな一人で、余興というハーモニカを吹いてみせるのだろう。「八十男の吹く「背くらべ」が笑わせてくれる。リズムもたのしい。「八十男」という、おどけた語の選択もよかった。

山口県歌人協会賞

泣きじゃくる子を自転車の前にのせペダル踏み込み風神になる

(三二五) 東京 北沢洋子

(評)

泣きじゃくっている子を、有無を言わず抱き上げて、自転車の前にのせ一気に漕ぎ始める。泣き声に負けないほどにペダルを踏み込んで、スピードをあげシャツの背中がまんまるに膨らむ。「風神」は、日本画にある風神雷神図のあの「風神」を思えばいいだろう。若い父親か、あるいは母親でもいいかもしれない。「ペダル踏み込み」が勢いを感じさせる言葉選びで、とてもいい。「風神になる」の直截も、よい。

宮島全国短歌大会実行委員会賞

「最後だよ」と友の持ち呉れしもみ殻を小芋の畝に惜しみつつ撒く

(二八〇) 山口^(防府市) 藤本 征子^{ゆきこ}

(評)

田んぼを作っている友は、これまで籾殻を毎年もってきてくれた。だが、その友も高齢になった。「最後だよ」と言って、もってきてくれた籾殻を畑の畝に撒くが、撒くにも、いつもの年より惜しみながら少なめである。友とのなからいの時間を思い、これからの自分たちの老いの時間を思う。何の説明もせず「最後だよ」から始まる初句もよいし、「小芋の畝」という具体もよい。

広島県教育委員会賞

子どもらが音符のようにこぼれだす校内マラソン朝から晴れて

(二) 広島 家島 晶子

(評)

「子どもらが音符のようにこぼれだす」という上の句で、校門をつぎつぎと走り出てゆく子どもたちが見えるようだ。校門とも何とも言っていないのだが。校内マラソンだから、全校生徒の行事なのだろうか。「校内マラソン朝から晴れて」、このリズム感もよく、すがすがしく、生き生きとした、たのしい歌となった。

甘日市市長賞

どんな夢見てるか園児のうふふにうふふを返し頭を撫づる

(九五) 福岡 大橋 拾子

(評)

保育園の先生だろうか。お昼寝の時間、ある園児が「うふふふ」と笑った。たのしい夢を見ているらしい。その笑い顔に思わず「うふふ」と笑いを返して、頭を撫でてやった。結句の「頭を撫づる」に、思わず手が伸びたという語氣がこもっていて、ここがよい。愛らしさ、いとおしさが、この結句にこもっている。

甘日市市教育委員会賞

いちまさんのやうな髪型似合ふよとかなしむ赤毛を父切りくれき

(五八五) 京都 赤岩 邦子

(評)

京阪地方では、市松人形のことを「いちまさん」というのだそうだ。赤毛は昔はからかわれたこともあっただろうか、子どもにとつて劣等感を覚える悲しみのものである。どうしてこんな赤毛に産んだのと悲しむ娘に、真つ黒い髪 of 「いちまさん」の髪型、よく似合つてると、父は慰めつつ切ってくれた。胸に沁む父と幼い娘の一場面だ。

嚴島神社賞

燕はいつ巢立つたか夕焼けが入道雲の腹染めてゐる

(五六九) 東京 栗栖優子

(評)

夕焼けが入道雲を染めている、ではなく、「入道雲の腹染めている」としたところがたいへん良い。「腹」としたことによって、一気に「入道雲」のかたちが見えてくる。夕焼けの色も見えてきた。歌は、こんなたった一言で変わる。その入道雲の夕焼け色を見ながら、いつのまにか燕も飛んでこなくなったなあ、と時の移りを感じている。

宮島観光協会賞

夕焼けを窓いっぱいに張りつけて10分遅れのバスやってくる

(四八〇) 福岡 西城燁子

(評)

「10分遅れのバス」があわてて入ってきたような趣き、いつも乗るバスだから「10分遅れのバス」という語が出てくる。そのバスの窓には夕焼けがいっぱいに張りつけたように輝いている。「夕焼けを窓いっぱいに張りつけて」、大胆な表現だが、一首全体がいかに元気な雰囲気。たのしい歌。

中国新聞社賞

夕の日に石膏の顔浮き立ちぬデッサンの手をしばし止めたり

(四九二) 熊本 山本 真美

(評)

夕方になって日が移り、窓から西日が真つ直ぐにデッサンをしている部屋に射し込ん
だ。そのとき、石膏像の顔がくつきりと光と影で浮き立って、じつにうつくしい。デッ
サンの手をとめて、石膏像の光と影にしばし見惚れるのである。夕方の光は、ときに魔
術のように異界を見せてくれることがある。そんな一瞬をうたった。

NHK広島放送局賞

命日に里の鈴蘭摘み帰りコップに挿せば母の声する

(三四七) 山口 吉田 房枝

(評)

母の命日に、実家に帰った。その庭の鈴蘭を摘んで帰ってコップに挿した。おそらく
鈴蘭は、母の好きな花だったのだろう。コップの花を見てみると、母の声が甦る。それ
を端的に「母の声する」とした。そこがよい。母を懐かしむ思いがこもっている。「里
という言葉も最近では使わなくなったが、「里の鈴蘭」、響きの良い言葉だ。

中国放送賞

悩んでる暇など無くて八十八歳食う飲む話す見る書く歩く

(二二〇) 山口 武重 周子

(評)

八十八歳ともなれば、食ったり飲んだり、こんなことも昔とは違って一仕事、人と話しをするのが認知症対策にはいちばんなどとも言われるし、虫眼鏡などもつかいながら見えにくい目を見開いて見、歌の一つも書いて、ウォーキングにも出かける。それだけであつというまに日が暮れる。悩んでる暇などありません、と。「食う」「飲む」以下七七に連ねた動詞が、なかなかの手腕。意欲的な老いの姿が良い。

広島テレビ賞

泳ぎ疲れ座敷に午睡する三人子の日焼けの細い脚の向き向きみたり

(五四二) 広島 寺田孝子

(評)

三人の子は、海辺のおばあちゃん家に夏休みで遊びに来たのだろうか。座敷は昔ながらの広い畳の部屋で、そこには小学生くらいのきょうだい泳ぎ疲れてぐっすり午睡中。日焼けした細い脚をそれぞれにあつちに向け、こつちに向けて。なつかしいような風景だ。「三人子」は「三人」だけでよい。子どもであることは全体からわかる。「泳ぎ疲れ座敷に午睡する三人日焼けの細い脚向き向き」。

広島ホームテレビ賞

波去りし浜に光れる青硝子遠く来たらし角のまるみて

(五八一) 千葉 富 永 加代子

(評)

「波去りし」とは、干潮のことを言うのだろうか。それとも、寄せた波が引いたとき、という意味か。「干潮の浜に光れる」と入った方がすっきりわかる。そこに青い硝子があった。拾い上げてみると、角がとれてまるまっている。どこから、どれくらいの時間、潮に揉まれてこの硝子玉はやって来たのだろう。遙かな時間を思ふ歌。

テレビ新広島賞

「幸せに暮らしました」と言うけれど白雪姫のそののち如何に

(五二二) 広島 正 藤 陽 子

(評)

白雪姫のお話は、誰でも知っている。もともとはなかなか怖いお話のようだが、ディズニーなどでは、王子様のキスに眠りから目を覚まして結婚し、「幸せに暮らしました」、めでたしめでたしと終る。しかし、その後は？そもそも女は、結婚してからの方がつらいこと、多いんじゃないの？ふとそう思った。結婚後の山あり谷ありを経験してきた女だからこそその発想。

優秀賞

みあらかに打つかしは手の確^たし確^たしと日供仕へて今日を始めつ

(二六) 山口 長尾 健彦

金網に右のスニーカーだけ吊るされてシンデレラまだ見つからぬらし

(六八) 広島 岩本 幸久

ひたすらに乳すう子にも憂い事何かあるらん眉根を寄せる

(九七) 埼玉 清塚 茅香子

なんとまあ怪鳥ドローンはスイツと浮き早苗を撫でて除草剤まく

(二三四) 山口 余園 岡子

足音で野菜は育つと宣まひし亡き友偲びて菜園^{さいえん}めぐる

(二五四) 山口 井倉 道代

介護せし義母^はの口癖「すみません」ありがとうなら報はれるのに
(二八二) 広島 小坂 修

駆除^{じゅう}という情なき言葉猪^いも鹿^{しか}も熊にも子はあり 非は人にあり
(三〇三) 愛知 添島 貴美代

わが顔を殴れよ雨よ斜め線もて憎しみを消すが如くに
(三二〇) 愛知 石田 賢吾

木斛の白き花びら掌にうけて父の好みし花ぞと思ふ
(三二九) 広島 下垣内 和子

父母の手にタッチをしては走りゆく何度も幼は確かめたくて
(三三三) 広島 三澤 明美

とぎ汁に命の種のぬくもりを感じてしばし手を浸し置く
(三三一) 埼玉 清水 英子

「俺やろうか」六歳の子いつしに俺、俺と言ったのもしくも見ゆ

(四七四) 広島 田 辺 操 子

九十一歳もういいだろうと思わない眠ってばかりの母だとしても

(四九〇) 山口 石 井 久美子

寝転びて夢二少年見しといふ天井絵馬を揚げば潮騒

(五二九) 岡山 大 熨 允 子

足腰を嘆いてばかりもいられねえ立てばつばめが天空を斬^きる

(五三四) 広島 河 崎 典 子

選外佳作

あにおとうと沈みし所ちがえども海にねむりて八十年すぎ

(二〇) 広島

延近 道江

この坂を下れば実家、亡き夫の学生帽の自画像が待つ

(七九) 福岡

辻野スマ子

行李開け風を通してまたしまう母の縫い目のねんねこ半纏

(一四五) 山口

倉谷 節子

弟がキープしていたウイスキー居酒屋で飲むその兄ひとり

(一五九) 広島

山田 典彦

重ねた手握り返さず祖母は往き温もりだけが吾の手に残る

(一九七) 福岡

鳴見はるみ

字引と言ひ字書とはつひに言はざりし父なり父の字引を使ふ

(二二〇) 山口

森田アヤ子

山峡の田んぼの隅は手作業で余り苗持て植えている農婦

(二二五) 山口

向井 桂子

慰霊碑に刻まれし名を愛おしく老人の指はいくども撫でる

(二三三) 東京

新美喜代男

涙拭きいきなり化粧を始めたる母なりキリリと眉を描きたり

(二五七) 広島

富田 清人

明治より田畑^{でんぱた}敷守り来て旧友^{とも}は呟く「おれで終り」と

(二八一) 広島

勝部 律子

塩漬けの梅酢あがれる嬉しさを分かちあひたし在^{いま}さぬ母と

(三二七) 茨城

大熊佳世子

ふうわりと柔^やらこう炊けし豆^{まめ}ごはん母の五月の十八番^{おはこ}でありき

(三五二) 滋賀

船岡 房公

百年を生きていつたんひと休みこがね実を成し竹群は枯る

(三六二) 広島

久保田智栄子

この辺が金魚の墓と土寄せる草刈鎌を持つ手休めて

(三六九) 滋賀

嶋寺 洋子

減反に就学不能を訴へしひとりを思ふ米価の値上げ

(三八二) 山口

森元 輝彦

「お幸せ」「はい」と答えて蓬摘み餅つくらんと土手に愉しむ

(三八三) 広島

金子貴佐子

贈られし猫柄の傘さしてみるひとりぼっちの五月の雨に

(三八九) 広島

松本 義子

宮島は満潮となり回廊にピチャピチャと足下涼し

(三九三) 山口

相川美津江

筏にて牡蠣は静かに膨れゆく染み入る雨を陽を喜びて

(四三九) 東京

遠藤 玲奈

まづしけれど人を羨むこともなし日に七千歩あゆむ足持つ	(四八一)	福岡	西城 燐子
切り分けて西瓜もちゆく両隣ひと月ぶりに顔を合わせつ	(四九三)	熊本	山本 真美
天気図の真つ赤に染まる広島忌冷房の部屋にて黙祷ささぐ	(五一一)	山口	清木 幸
七つから八十年を生き抜いた背筋を伸ばす八月の空へ	(五一二)	北海道	福島 明美
丁寧に痒いところに手が届くことを言われてますます痒い	(五一七)	広島	たてだじゅんこ
音も無く雨ふる海を眺めいて我に下りこよ歌よむ心	(五二七)	山口	大井 惇子
子つばめが五羽せわしくなく飛び交いて枇杷 ^{びわ} の出荷もピークとなりぬ	(五五五)	香川	好井 晶子
夏の日の午後四時ごろ咲くオシロイバナひとやすみに入る目安にしており	(五五九)	千葉	猪野 富子
暑さゆえ畑に実る獅子唐もちぢれて小さき拳骨となり	(五七七)	熊本	林田 留美
日盛りに登校せし児は水筒よりトマトに注ぐ冷たき水を	(五八〇)	千葉	富永加代子
仏前に集ひし写真の中央に妣と紛へるわれが座しをり	(五八七)	栃木	上島 妙子